

デジタルアーカイブによる新たな 価値創造

望月 頌、伊差川葵、久保田若葉、久世 均

1 はじめに

「飛騨高山匠の技」について地域と連携しデジタルアーカイブの開発を進め、現在約9万件の「飛騨高山匠の技デジタルアーカイブ」としての構築を進めている。

そこで、この「飛騨高山匠の技デジタルアーカイブ」に新たな情報を追加し、「知的創造サイクル」を実現するための「知識循環型デジタルアーカイブ」への再構築と、それを有効的に活用するための教材、教育方法を開発し、デジタルアーカイブによる新たな価値の創造について実践しているので報告する。

2. 知的創造サイクルとデジタルアーカイブ

飛騨高山匠の技デジタルアーカイブは、2017年～2020年の文部科学省私立大学研究ブランディング事業に加え、**2022年度岐阜県私立大学地方創生推進事業**において、収集管理された飛騨高山匠の技に関する地域資料9万点のデータで構成されている。

2. 知的創造サイクルとデジタルアーカイブ



↑ 文部科学省私立大学研究ブランディング事業岐阜女子大学
<https://digitalarchiveproject.jp/>

2.知的創造サイクルとデジタルアーカイブ

・飛騨高山匠の技に関する総合的な地域文化の創造を進めるデジタルアーカイブは、「**知的創造サイクル**」を目的とした総合的なデジタルアーカイブとしてとらえている。

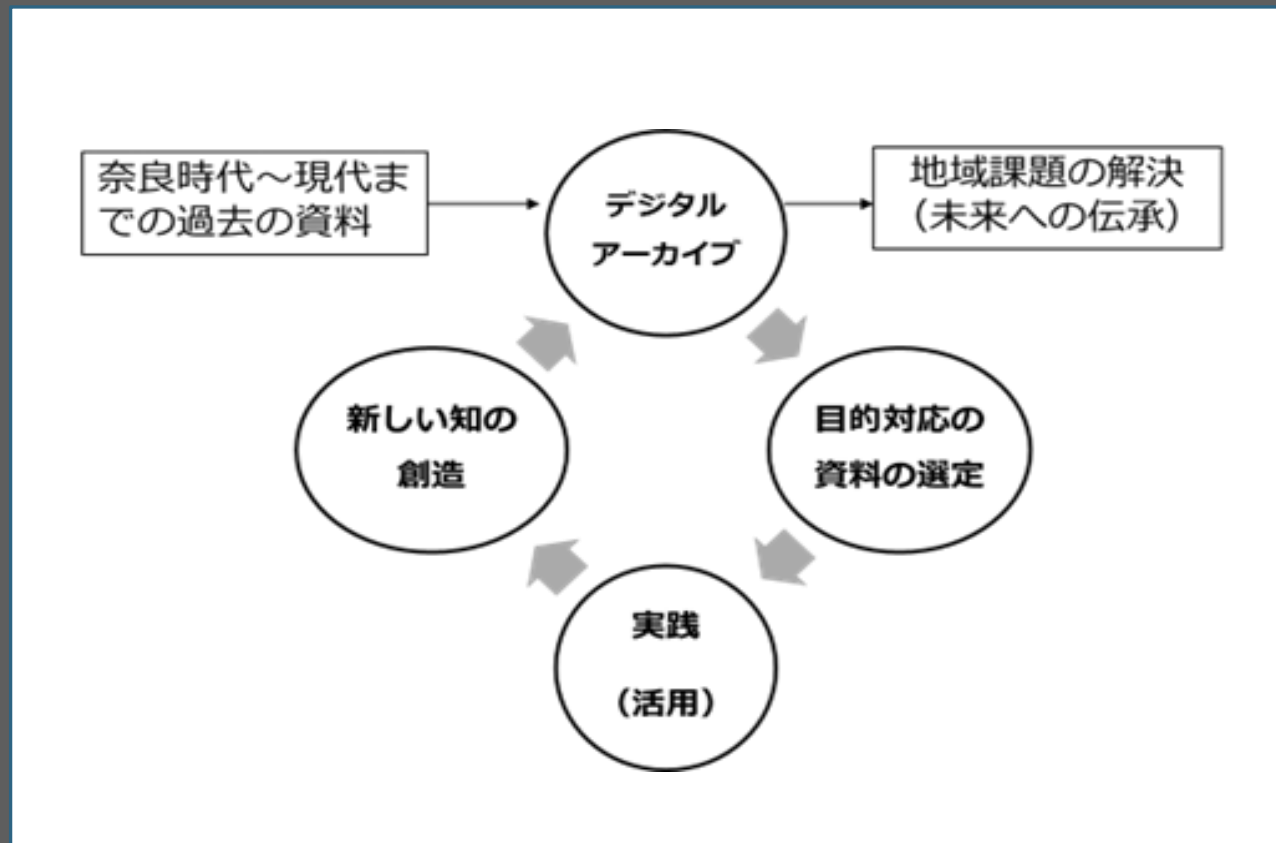


図1 知的創造サイクル

2. 知的創造サイクルとデジタルアーカイブ

飛騨春慶塗や一位一刀彫りなどは、飛騨高山匠の技の伝統的工芸品とされているものの多くの課題



そのため、

- ・ 匠の技を受け継ぐ後継者も不足、飛騨匠の技やところが次の世代に伝承することが困難となってきた。

2. 知的創造サイクルとデジタルアーカイブ

後継者不足の解消としての打開策



地域の知的資源を生かして新たな価値を創造
することが可能

3. 飛騨高山匠の技デジタルアーカイブ

活用するためには、結果よりも**プロセス情報**
が必要



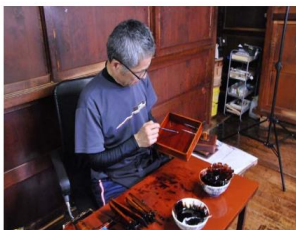
様々な意思決定結果より、意思決定プロセスの方が重要

3. 飛騨高山匠の技デジタルアーカイブ

一位一刀彫りや飛騨春慶塗の制作過程などの様々なプロセスを中心にデジタルアーカイブ

飛騨春慶

<http://digitalarchiveproject.jp/information/飛騨春慶/>



慶長年間(1596～1614)高山城下で、神社仏閣の造営工事に携わっていた大工棟梁、高橋善左衛門が仕事中に、たまたま打ち割った材の断面の美しさに心を打たれ、その板を使って風情な盆を作り、金森可重の子重近(金森宗和)に献上した。重近はその木目に感動し、御用造師の成田三右衛門に木目の美しさを生かして漆を塗るよう命じた。三右衛門は素地を生かした透塗で、その盆を塗り上げた。

成田三右衛門義賢(晴正)は京都で造師をしていたが、お抱え造師として飛騨に入国して春慶塗を考案し、その子成田三右衛門正利(三休)もお抱え造師となり春慶塗の改良に貢献した。飛騨が幕府になっても飛騨春慶塗は地場産業として存続する。

飛騨春慶塗という独特の漆器が生まれ育ったのは、飛騨が良材の産地であった背景と、伝統的に自然の樹木の美しさを知りつくり、木の魅力を引き出す木地師の優れた技があったからである。

春慶塗は、原料漆に透明度の高い日本産の漆を使い、精製すると共に花油などを混合することで光沢と透明度をより一層良くする。この透明度の高い漆(すき)漆(うるし)が下地の裏側を美しく透せ、向を透ることでその彩りを変化させながら、透明度をさらに増していく。木地は板物と、隠輪(くろろ)による彫物(ひきもの)に分けられるが、飛騨春慶塗は板物の加工技術に特徴が見られ、「角物」と「曲物」がある。木地の美しさを醸し出す木地師と、木地の美しさを引き出す造師の二者一体の共同芸術で成り立っている。

← 飛騨春慶塗

<https://digitalarchiveproject.jp/information/%e9%a3%9b%e9%a8%a8%e6%98%a5%e6%85%b6/>

一位一刀彫り →

<https://digitalarchiveproject.jp/information/%e4%b8%80%e4%bd%8d%e4%b8%80%e5%88%80%e5%bd%ab/>

一位一刀彫

<http://digitalarchiveproject.jp/information/一位一刀彫/>



木の細工に匠の技を極めたのは江戸在住の平田亮朝である。亮朝は文化6年(1809)に高山で生まれ、若くして江戸の根付彫刻の大家といわれた山口友頼(寛政13年江戸生まれ、3代続いた)の門に入り、江戸で根付彫刻の大家として大成した。浅草横付に住み、江戸で有名な日本橋通塩町の小間物問屋「日野屋」の大事なお抱え根付彫師として活躍。しかし、38歳と若くしてその生涯を終えている。亮朝が江戸にいたとき、高山から江ノ島(すけはら)の、中村亮秀(すけよし)、松田亮長(すけなが)が弟子入りし、共に高山に傳って身を立たした。特に亮長は若い頃から彫物にすぐれ、写実的な小動物の彫刻を最も得意とした。材料も櫨(ひのき)、なつめ、梅、竹などを使っていたが、のち一位材を用いて簡潔な彫像を残す一刀彫の様式を完成させた。

旅好きであった亮長は、生涯全国各地を巡って見聞を深めて自己研鑽に努め、1年の半分以上を高山で過ごすことは希であったという。旅先は絵日記等によって知ることができ、各地の名勝地を遊歴し、彫工の名家を訪ね、古寺社の彫刻を研究するなどして心技を磨いた。

旅の途中で旅人形を見て、その筆色が非常に濃く、刀痕を塗り込めてしまい、技術の良し悪しがわからないので、自ら意匠を持って刀法を考え、彩色を施さずに飛騨の名木一位の天然の美しさを生かした簡潔な彫像を残す一刀彫の様式を考案したとされている。

亮長の作品には写実的なものと、今日の一刀彫に見られる極限まで彫刻化された面で作られた。単純ではあるが、良くその物の特徴をつかみ、作品のうま味がある。亮朝は明治4年(1871)3月14日、下山の自宅で82歳の生涯を終った。

3. 飛騨高山匠の技デジタルアーカイブ

デジタルアーカイブする対象については、知識循環型社会では知識基盤社会とは異なり、利活用することにより、**新たな知識を創造する知識循環型社会に対応した新たなデジタルアーカイブを開発**する必要がある。

4.デジタルサイネージへの展開

約9万点の地域資源をデータベースにて保管



地域資源デジタルアーカイブを交通・観光に利活用
にするために、デジタルサイネージへの展開

4. デジタルサイネージへの展開

「デジタルサイネージ」とは

「電子看板」、「電子公告」などとも呼ばれている。



↑引用元
https://www.irasutoya.com/2018/01/blog-post_12.html

4. デジタルサイネージへの展開

約9万点の情報から3本の動画コンテンツ(日本語版・英語版)を作成し、現在、**中部国際空港の国内線(2,019年設置)並びに国際線(2022年設置)で展示**



←中部国際空港(国際線)
に設置しているデジ
タルサイネージ

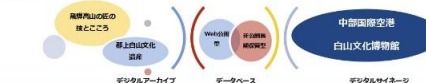
→デジタルサイネージ
設置を知らせるポ
スター



中部国際空港における デジタルサイネージ

デジタルアーカイブの新しい利活用の展開

本学では、知能情報社会においてデジタルアーカイブを有効に活用し、新たな知を創出するという理念に基づき、本学のデジタルアーカイブ「知の形成型サイクル」の手法により、地域実証に実践的な解決方法を確立するために、地域に開かれた「地域資源デジタルアーカイブ」による知の拠点形成のための「基盤整備」を行っています。その中で、地域資源デジタルアーカイブを地域の課題の解決のために、デジタルサイネージへの新しい利活用への展開をしています。2019年7月より中部国際空港の国内線搭乗ゲート上で、飛騨高山のデジタルアーカイブを活用したデジタルサイネージを展開していますので是非ご覧ください。今後、学生による映像コンテンツを随時公開してまいります。



私立大学研究ブランディング事業
「地域資源デジタルアーカイブによる知の拠点形成のための基盤整備事業」
岐阜女子大学

4. デジタルサイネージへの展開

地域資源デジタルアーカイブの新しい利活用
として可能性



デジタルサイネージ

5. 飛騨高山匠の技ガイドブックの作成

飛騨高山匠の技デジタル
アーカイブのガイドブック
として、紙メディアとWeb
公開型デジタルアーカイブ
とQRコードで連携した冊
子を作成



図2 飛騨高山匠の技のガイドブック

5. 飛騨高山匠の技のガイドブックの作成

飛騨高山匠の技デジタルアーカイブでは、**左甚五郎**を取り上げている。

5. 飛騨高山匠の技ガイドブックの作成

飛騨高山匠の技というブランドに新たに
左甚五郎というサブブランドを位置づけ、
さらに飛騨高山匠の技の総合的なブラン
ド力を高めることを提案する。

6.地域課題探求型学習への利活用

地域課題を探求し、深化させ課題の本質画を探り実践的な解決方法を導き出すことを高大連携により**地域課題探求型学習への利活用**を行った。

6.地域課題探求型学習への利活用

高校生により収集・記録された地域資源や資料は、地域資源デジタルアーカイブに追加して蓄積され、地域資源デジタルアーカイブが様々な高大連携の実践により随時増殖するというデジタルアーカイブにおける…



「**知の創造サイクル**」を実現

7.おわりに

本学では、デジタルアーカイブを有効的に活用し新たな知を創造する本学独自の「知的創造サイクル」を生かして地域課題を探求し、深化させ課題の本質を探り実践的な解決方法を導き出す人材を大学に変革することを目指している。

参考文献

(1)久世均：知識循環型社会とデジタルアーカイブ～デジタルアーカイブを活用して地域課題の解決を～，地域開発，2018.春 Vol.625

(2)久世均：地域資源デジタルアーカイブによる知の拠点形成のための実践的研究【1】～知的創造サイクルによる地域課題の解決手法の開発～，デジタルアーカイブ研究報告，2019.Vol.2，2020.3.31 他